

2013年 夏季研修会 報告

8月5日、たかつガーデンで夏季研修会を行いました。午前は、全体会という形で、伊丹昌一先生にご講演をしていただき、午後は演習という形で、より深い内容についてお話しいただきました。

午前130名、午後50名の定員が早い時期にいっぱいとなり、参加できず残念という方が多くおられたこと、お詫び申し上げます。

また、午後には、象の会の皆様に教材制作の実技研修を行っていただきました。長年お世話になりました3人の講師の方に、最後のお願いという形で実現した研修でした。こちらも前後半各45名の定員いっぱいの参加で好評の内におこなうことができました。

全体会

「愛着に課題のある子の理解と支援」

講師 伊丹 昌一氏

(梅花女子大学心理こども学部)

「愛着に課題のある子の理解と支援」ということでお話をいただきました。最初に、障がい名が何であるかよりも、その子が困っている事に対して支援するということが大切である、ということをお話されました。

『反応性愛着形成不全 (RAD)』は、安楽・刺激および愛着に対する子どもの基本的な身体的欲求が持続的に無視されたり、一次的な世話人がくり返し変わったりすることにより、安定した愛着形成が阻害されることが原因とされています。そして、抑制型と脱抑制型があり、前者は自閉症スペクトラム (ASD) に、後者は ADHD に類似していることを話されました。そして、この子どもたちへの支援としては、保護者や本人へのカウンセリング・ストレスマネジメント・ソーシャルスキルトレーニング (SST)・個人攻撃の罠に陥らない支援・包括的対応などが大切であるとともに、障がい特性を考慮しつつ他の子どもたち同様に、ルールに従い対処することが大切だと話されました。

ASD の子どもたちによく見られる特性の一つに、周りが予測できない行動をとることがあります。伊丹先生から次の様な例を話して頂きました。ひとりの子が前に来て、「いつ死ぬの」と聞きました。この子は「白髪→老人→死」と考えて、伊丹先生の事を心配していたのです。それに対して、「ありがとう。これからもまだ生きるで」と言うと、ニコッと笑ったということです。また、ADHD の子どもたちに対するほめ方としては、目立たないときこそ誉める (人前でなくマンツーマンで、





その子にあわせて誉める)・すぐに誉める、まめに誉める・目に見える具体的なごほうびの使用(ジェスチャー・はなまる・シール等)が有効ということでした。特に誉めるのはその事があって60秒以内という即時強化がとても有効であると言われました。

注意の仕方として、「廊下は走らない→廊下は静かに歩こう」・「けんかはしない→言葉で伝えよう」などと、否定的ではなく肯定的な言い方をします。また、「短くはっきりとした話し方」・「どう行動して欲しいか分かるように伝える(感情に訴えるより理屈で説明する方が理解しやすい)」・「一般論で話す方が受け入れやすい」・「行動は修正するが人格は否定しない」ということです。また、傾聴・受容・共感というカウンセリングマインドを大切にするとすることも話されました。

子どもの行動を理解する方法として、『行動の3分割』ということをお話されました。それは、「行動の手がかりやきっかけ」→「子どもの行動」→「行動の後の対応や結果」を、事実にして分析し対応することから、子ども理解がはじまり支援者としての対応を考える事ができます。

最後に、どんな時に子どもたちが変わったかということについて、幾つか示されました。①家族のありがたみ、苦しみが分かったとき。②将来の目標が決まったとき。③信用できる人に出会えたとき④人と話す自身がついたとき。⑤勉強が分かったとき。⑥大切な役を任された(認めてもらった)とき。⑦物事に集中できるようになったとき。⑧最後まで諦めずにやろうと思ったとき。これらすべてに共通するのは自己評価の高まりです。また、何ができるかということだけでなく、どんなやりとりのができるかが大切です。そのための環境を整えることも大切です。

2時間近いお話を、自分たちの目の前にいる子どもたちを思いうかべながらだと思いますが、参加された方たちは頷いたり考え込んだりしながら、聴いておられました。感想の中にも、2学期、新しい気持ちで子どもたちに接しますということを書いている方もおられました。

分科会

「教育相談の極意(演習)」

講師 伊丹 昌一氏

相談を受けるときには、①この人は何を拒絶しているんだろう。②この人は何をわかってほしいんだろう。③この人は何を妄信しているんだろう。④この人は本当はだれと闘っているんだろう。⑤(①～④の)「考え方の偏り」を探ること。⑥そして、その偏りの多くが子供のころに作られる。ということに沿ったお話と演習でした。

教育相談の分類と対応は、①具体的な子育てに関わるコンサルテーション的なもの。→自信を持って毅然と話し明確にアドバイスする。②保護者自身の悩みに関わるカウンセリング的なもの。→保護者の状況や意向を理解し受容し、自主的に問題解決ができるように援助していく。③虐待などのように福祉的立場から指導を行うガイダンス的なもの。→子どもの最善の利益を考慮し、地域の



関係機関と連携・協力して行う。④学校園の保育・教育内容や管理運営にかかわる抗議・要望・クレームへの対応。→直接的な教育の責任者として、保護者への説明責任を果たすことが基本であり、誤解のままに放置しないことと、学校園として基本的なマニュアルを作成して対応する。

保護者と関わる時の基本的な姿勢としては、①受容的・共感的な態度で、こころを傾けて保護者の話を傾聴する。②「話を受け止めよう、理解しよう」という姿勢から、相互の信頼関係が形成され、保護者の理解や協力が得られるようになる。これがなければ教育相談は成立しない。ということの大切さを話されました。

その後、参加者がお互いにペアになり、相手の話を聴くという演習を行いました。その際、相手との距離感・座り方・非言語的メッセージの共有を行うことや、相手の話の中の言葉を使って共感的な気持ちを返す（～だから、〇〇ですね）ことの大切さを話されました。最初はぎこちなかった参加者も時間がたつにつれて、傾聴してくれる人がいることで話が弾むようになっていきました。

その後、保護者と教師が共通の基盤に立って子どもの現状を受け止め、共通理解のためのアセスメントを行うことや、発達障がいの子どもの保護者支援についてのアドバイスをいただきました。

さらに、様々なタイプの「気になる保護者」に対しての具体的な支援についても話されました。

虐待をしている保護者への支援は、子育ての難しさや家庭内の種々の課題に悩んでいることが多いので、受容的な態度で悩みを聴き共感し、信頼関係を作ることが大切であるとともに、各種相談機関との連携が必要であり、保護者対応ではなく保護者支援という観点からの取り組みが大切であると言われました。

最も大事なことは、「何ができなくても、何を言っても、何をしても、『あなたは愛されている』のメッセージを送り続けること」です。そして最後に、「親が笑っていなければ子どもは笑えない。



笑うことにより自分を受け入れることができる」
「すべては子どもたちの笑顔のために」という言葉で、お話を終えられましたが、その際に、教師にも笑顔が必要ということをつけ加えられました。

教材制作研修

象の会 朝井 翔二氏、松永 榮一氏、内藤 壽氏

昨夏、60周年記念大会を開き、実技研修を行わなかったところ、多くの方から、「来年はお願いします」という要望がありました。そこで今年の開催をお願いしたところ、象の会の方は、いったん辞退されました。それは次のような理由によるものでした。





- ①現場から離れて長くなり、提供できる教材が適切かどうか判断しにくい。
- ②特別支援教育の時代になり、対象となる子どもたちが広がり、そのニーズが把握しにくい。
- ③3人とも老齢で作るものの準備が大変に感じるようになった。

しかし、会員の方から「ぜひ！」という強い要望があると何度もお願いしたところ、無理なお願いを聴き入れてい

ただき、最後の1回、ということで今回の研修を行って下さいました。今まで十数年の長きにわたり、私たちに教材作りを熱心に教えていただいたこと、感謝の気持ちでいっぱいです。

今回、3人の方は、例年にも増して下ごしらえ・準備など念入りにご用意されて当日に臨まれました。参加された方の感謝感激のうちに教材制作が行なわれ、「今回は最後は惜しい！」という声が多くありました。

今まで、さまざまな手作りの教材が子どもたちに感動を与えてきました。そして、子どもたち自身が物を作る体験につながったこともあります。もの作りは、素晴らしい体験・感動を子どもたちだけでなく私たち教職員にも与えてくれました。

これから、象の会の方に「教えてもらう」のではなく、今まで学んだことを「受け継ぎ」、新たに「創る」ことができるように、私達みんなが励んでいかねばならないと思います。そして3氏の思いを受け継ぎ発展させていくことをめざしましょう。

夏休みが短くなるなど、もの作りにじっくり取り組みにくくなっている、という声もありました。しかし、「ものを作る」経験、手作りだからこそ生まれる感動、これらは、いつの時代になっても価値のあるものだと思います。

あらためて象の会の皆様に感謝の意を表します。有難うございました。

